

ベルギーで DI で生まれるということ

Being Donor Conceived in Belgium



リーン・バスチアンセン
Leen Bastiaansen

ベルギーでの AID 出生者

要 旨

2007 年以降、ベルギーでは配偶子提供は匿名で行うよう法律で決められています。非匿名の提供は特定の条件下では容認されますが、こうしたことはめったに起こりません。非匿名での提供は違法なのです。2012 年以降、提供配偶子での出生者がしだいに声を上げるようになり、出生者の出自を知る権利の法的な承認を要求するようになりました。それ以来、さまざまな政党が提供精子で生まれた人のニーズに応えようとしていますが、今日まで政治的合意に達しておらず、ドナーの匿名性が依然として標準とされています。

1984 年生まれの私は、法規制のない時代に提供精子で生まれました。しかし、ドナーを匿名とすることは事実上の手順であり、提供精子で母の妊娠を達成した医師は私の両親にどうやって妊娠したかその方法を秘密にしておくようにアドバイスしました。私は 21 歳のとき、父が不妊症であるために匿名の精子提供によって妊娠したことを知りました。この告知は私に大きな衝撃をもたらし、立ち直るのがたいへんでした。次の年、私は実の父を知る権利のために戦いました。私の必死の搜索は、痛ましい批判、否定、そして中傷に見舞われました。ですが、31 歳でようやく実の父を見つけ、何度か会いました。彼は親切で、私のすべての質問に喜んで答えてくれます。私は感謝しています。しかし、彼を見つけたことですべての悲しみが解決できたわけではありません。新たな課題が生まれ、提供配偶子で生まれたということは、この先も複雑で厄介なことが決してなくなるのだということを悟りました。

Abstract

Since 2007, donor conception in Belgium is anonymous by law. Known donation is tolerated under certain conditions but rarely occurs. Identity-release donation is illicit. Since 2012, donor conceived adults are increasingly raising their voices, demanding legal acknowledgement of their right to know their origins. Although different political parties are since then trying to include donor offspring needs, no political consensus has been reached until today, so donor anonymity remains the norm.

Born in 1984, I was donor conceived in an era without legal regulations. However, donor anonymity was the de facto procedure and fertility doctors advised recipient parents to keep the method of conception secret. At 21, I learnt I was conceived through anonymous sperm donation because of my father's infertility. This revelation came as a huge shock, hard to recover from. The next years I spent fighting for my right to know my biological father. My desperate search was met with hurtful criticism, denial, and degradation. At 31, I finally found my biological father. We met several times. He is kind, and willing to answer all my questions, which I am grateful for. However, finding him has not resolved all the grief. New challenges surfaced, and I learnt that being donor conceived will never cease to be complicated and troubling.

報 告

自己紹介

今、ベルギーに住んでおりますので、DIで生まれることについて、ベルギーの状況についてお話ししたいと思います。そのあと、DIで生まれた者としての個人的な体験についてお話ししたいと思います。

私は、DIを大きな氷河のように例えたいと思います。表面はシンプルかもしれませんが、氷山の下にはいろいろな複雑な要因があり、人々がそういうことについては知らないという点で氷山と似ています。この複雑なところについては、人々はよく知らないなのです。

そういうことで、まず自己紹介をしたいと思います。私は1984年に生まれ、現在、37歳です。3人きょうだいのちょうど真ん中で、臨床心理学者として働いています。ベルギーのハーボーケンという所に住んでいます。『フランダースの犬』で有名な所です。ボーイフレンドと住んでいて、犬も一緒です。匿名の精子ドナーの精子で生まれました。

ベルギーのDIの歴史

ベルギーのDIの歴史について、それから、法的な脈絡についてまずお話しします。推定ですが、ベルギーにおきましては、初めての医学的支援による精子提供は1940年の後半、あるいは、1950年代の初めだと言われています。最初の精子バンク、凍結精子を提供する精子バンクができたのは1970年で、初期におきましては、DIはレズビアンではなく、男女のカップルに実施されました。しかし、1980年代にはレズビアン、そして、シングル的女性もDIを受けることが可能

になりました。現在では、DIの80パーセントがシングル女性かレズビアンカップルに実施されています。

1980年代の後半になりますと、卵子の提供も行われるようになりました。1990年代、デンマークからの提供精子の輸入が増大しました。現在はベルギーで使われている提供精子の3分の2がデンマーク由来のものであるというふうに言われています。

2007年までベルギーにはDIに関する法的な枠組みはありませんでした。クリニックがそれぞれルールをつくり、実際にはドナーの匿名性が支配的でした。ドナーのアイデンティティ、つまりドナーは匿名とされていたのです。そして、親にも秘密にしておいたほうがいと伝えていました。つまり、子どもに、どのように生まれてきたかということを隠すようにアドバイスしたのです。

それが少し変化したのが1980年代、1990年代ぐらいです。レズビアン、そして、シングルの女性がより多くその治療を受けるということになったことによって、彼女たちが、精子ドナーを使ったことを隠すということは難しいですから、これが変化を促すことになりました。タブー、そして、匿名性をなくすということに役立ったのです。

ただ、男女間のカップルの多くは、匿名性を好む可能性があるといわれました。現在でも子どもがDIで生まれたことを親から話してもらえていないということが多くあります。2007年、生殖補助技術に関する法律が制定され、今はこの法律にのっとって実施されています。ドナーは匿名であることが標準です。そして、家族や知り合いなど身内の非匿名の提供も可能ですが、ただ、精子提供にはそうしたケースはほとんどありません。このオプションを含めたのは、ボランティアで卵子提供する人を見つけるのが難しいということがありました。つまり身内からの提供も認めないと卵子提供者がみつからなかったのです。でも臨床も、診療所もそれに反対することが多い。オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、オランダで許されている非匿名での提供は、ベルギーでは禁止されています。最大で6家族まで提供できることになっていますが、国内の病院全体を網羅する中央登録制度はありません。つまり、トータルな提供に関する登録制度がないので、そのリミットを超えた数になっているかもしれません。優生学的な選択は禁止ということですが、医師はレシピエントの見た目などにあわせてドナーを選びます。定額の費用保証は可能です。ということは、特に精子ドナーは、提供によって場合によってはかなりもうかるということですね。これは商業的になっているということです。治療前、そして、治療中のカウンセリングは法律で決められています。開示は明示的には進められていないということです。現在、診療所は親に対して、子どもに対してオープンであるようにアドバイスはしますが、かなりその点は親に任されています。

出生者による活動

ベルギーにおきましては、提供配偶子で生まれた人たちの活動が2012年から始まっています。ですから、歴史はまだ浅いといえます。私たちがやろうとしていることは、政治的なロビー活動や、ドナーの匿名性の禁止、そしてドナーや子どものニーズについて一般の認識を高めるということです。それで、提供者と子どものコミュニティをつくることにしました。

2015年、議会の聴聞会が開催されております。DIで生まれた子どもたちが証言をしています。そして、親や学識者、不妊の専門の医師などが証言しています。その結果、その数か月後に新しい法律が提案されました。完全に提供者の匿名性を禁止するところから、あるいは匿名と非匿名のダブルトラックのシステムを導入するなど、いろいろな範囲のものが提案されました。でも、現在もまだ、コンセンサスは得られていません。そういうことで、あれから6年も経っているわけですが、ドナーの匿名性が支配的なままです。

2015年の終わり頃、ベルギーではじめて、DIで生まれた人がオランダのドナー登録を介して、生物学的父親を見つけることができました。詳しくは後で話しますがそれが私なのです。2017年以降、提供を受けた多くの人たちが商業ベースのDNAテストや遺伝子研究によって得た商業用のDNAデータベースを利用して、生物学上の親類を探しています。ダミアンがしたように、多くの人々がそれを利用して、探し当てています。

2021年、今年ですけれども、フランドル地方の政府がアンセストリーセンター(祖先センター)というものを設立しました。議会の聴聞会を行った後のことですが、強制的に養子となった過去の被害者のためのものです。祖先センターをつくって、壊れてしまった家族をまた元に戻すことが目的で設立されました。これはDIとも共通している問題があることから、DIで生まれた子どもも、そこに登録をしてDNAテストを受けることができます。でも、センターが開設されたのは今年なので、何人登録されたかは分かりません。非常に典型的なベルギーの制度で、非常にばかげた制度になっています。非常に複雑な政治的な状況の結果、そんなことになっているのです。連邦法では、その子どもたちが遺伝的なルーツを知る権利をなく奪している一方で、フランドル地方の法律の下、子どもたちはDNA検査を受けることができるわけです。それによって遺伝子、医学的な親戚を探ることができるということで、この状況はあんまり長くは続かないと思います。ドナーの匿名はいずれ連邦法でも禁止されるということになると思います。私の今、申し上げた話の参考文献はスライドにある通りです¹。

私の経験

次に、私の個人的なストーリーについてお話したいと思います。

私は1983年の秋にDIで生まれました。父親に不妊の問題があったとのことで、親たちは、子どもに対してこのことは秘密にしておくようにとアドバイスされたようです。親はそれを守ったわけですね。私は子どもの頃、家族の間のつながりが欠如しているように感じていました。特に

¹ References

Ombelet, W., & Van Robays, J. (2015). Artificial insemination history: Hurdles and milestones. *Facts, Views & Vision in ObGyn*, 7, 137-143.

Pennings, G. (2010). The rough guide to insemination: cross-border travelling for donor semen due to different regulations. *Facts, Views & Vision in ObGyn*, 55-60.

Thijssen, A., Dhont, N., Vandormael, E., Cox, A., Klerkx, E., Creemers, E., & Ombelet, W. (2014). Artificial insemination with donor sperm (AID): Heterogeneity in sperm banking facilities in a single country(Belgium). *Facts, Views & Vision in ObGyn*, 6, 57.

父方の親戚の中にと、よそ者のような気分でした。思春期になりますと、話しておかないといけないと思うのですが、私が8歳のときに親は離婚し、そして、日曜日ごとに私たちは父親と会ったものの、父親との距離はかなり離れていきました。ティーンエイジャーになったときにはその距離感に非常に苦しみました。父親と疎遠になったような気持ちだったのです。しばしば、どうやって、本当に自分がこの人から生まれたのだろうかと思ったものです。全くつながりがなく、父親も私に関与してこなかった。そのことを非常に恥ずかしく思い、また後ろめたさもありました。父親についてこんなことを思う自分は、悪い娘に違いないと思ったのです。

21歳のときに父親についての悪夢を見まして、それで朝食を取りながらそういうことを母親に話しました。母親は、ちょっとあなたに話しておくべきことがあると言い、前にいうべきだったかもしれないけれども、あなたの父親は実の父親ではないんだと、そのときに初めて母から聞かされました。そのときに私は泣きだしました。いろんな質問もしました、どうして、なぜと。彼女が説明をし、私は衝撃を受けました。同時に、非常に大きな開眼がありました、納得するものがあつたわけです。長期にわたって混乱していた理由が分かつたのです。

どちらにせよ、非常に不安な気持ちになりました。病気の時のように、2日間、ベッドに入つたまま、食事も取らず、ずっと泣いていました。そして、私自身の体や見た目がひどくて、嫌悪感を持ちました。自分に対して自己疎外感があつたのです。非常に自己喪失、アイデンティティ・クライシス、存在の危機を感じたのです。私が知っている世の中が基本的に変わつてしまつたのです。いろいろなものの秩序が崩壊してしまつた。私が知つていたことは全てうそであつた、私自身がうそであると感じたのです。基本的な信頼感を喪失してしまつた、そういうことは人にあつてはならない、人間としては基本的な信頼感がないと生存し続けることができないのです。

私に対して、親が21年間うそをついてきた、こういう基本的なことについて、うそをついてきたのです。もっと怒るべきだつたのかもしれませんが、母親も真実を語る時に泣いていました。彼女も悩んでいたのです。彼女がこの秘密を守つたのだということで、私は彼女に感情移入をしました。この秘密保持は、その時代の雰囲気や環境がそうさせたのだということで納得しました。

私の中に繰り返しDIのことが浮上しました。私自身の怒り、悲しみを抑え込もうとしました。毎日、学んでいたのは、喪失とか裏切りとか私が感じていることは、他の人たちには不都合な事実だということでした。でもこれは多くの提供型医療で生まれた人々にとって重大な問題なのです。本来そんなふうであつてはならないのです。

母親は他の人にいうなど、私に言いました。非常に寂しく思いました。21歳の子どもで、大学で学んでいました。友達と一緒に過ごすことも多く、世界を発見する、そういう年頃なのです。一方、自己喪失を感じ、そして、誰にもこれは話せないということで、非常に恥ずべき秘密を持たされたような気がしました。数カ月経つて、最も親しい友達にやっと話ることができました。長年、これを泣かないで話すということは無理でした。私はこの苦悩を隠し続けたのです。

それからの数カ月、数年、いろんなことが変わりました。私の人生が変わりました。DIという概念にもなじみ始めまして、実の父親は誰なのだと思うようになりました。認識としては、1人の男性がいて、私が特別重要な関係を持っているけれども誰だか分からない。彼に出会つたとしても、路上で会つたとしても分からない。私は常に、街中で、中年のブロンドの髪でブルーの目を

持っている人たちを目で探すようになり、そういう人を見るたびに、私と同じような特徴を持っているかどうか、私の父親かどうかということを感じるようになりました。決して、楽しいことではありません。嫌なことです。でも、そうせずにはいられませんでした。インターネットで情報を探しているときに、自分にはドナーが誰かを知る権利が全くないということが分かりました。私がどこから来たのか、自分の出自を知ることができないということは非常に苦しいことでした。正義が施されないということに関して、私は常に怒りを覚えたのです。

私のこれまでを壊し、盗まれた人生書き換えることを夢見て、数年が経ち、私は自分が生まれた不妊症の診療所にEメールを出しました。実の父親が分からないことで、私は非常に苦悩をしていて、助けてくださいと書いたのです。でも返事は来ませんでした。診療所に電話をすると、心理学者とのアポイントを取ってくれました。基本的には門前払いでした。取り合ってくれませんでした。私のファイルが存在するかどうかを教えてくれませんでした。後で、同じ不妊診療所の医師がテレビに出て、自分の実の父親を知りたいと問い合わせた人はいないというそをついていたのです。私は非常に大きな不妊治療を行う産業と戦わなければならないということを実感しました。子どもたちの福利について考えていない、不妊治療の業界と戦わなければならないということを実感したわけです。これは私と親ではなくて、私と社会との戦いになったのです。非常に無力な気分でした。

2011年、自分と同じようにDIで生まれた人に初めて会いました。私と同じような道を歩んでいる人で、その権利を求めて戦うという気持ちを持った人でした。初めてDIで生まれた人に会って、私は1人ではないということを感じて、かなりのパワーをもらいました。そういう人たちとより多く対話をするようになりました。オフラインで、そうした人たちと会って、彼女らも全く同じ問題と戦っているということが分かったわけで、そういう体験をするということは、自分の恥ずかしいという気持ち、あるいは、罪の意識を拭い去るのに、非常にいい影響を与えてくれました。

彼女らと会うことによって、この問題は非常に膨大なものであって、非常に制度的な不正義、不当なことが行われているという認識を私は高めていきました。うそと、そして、実の家族と会うことができないという非常に大きな喪失を体験しているということが分かったのです。政治家、医師、そして、親側に、色々なインタビューなどをしました。これは一般の国民の認識を高めるという、また政治的な進展にもつながりました。そして、多くの人たちと私は出会いました。世界的に、ケン・ダニエルズさんとか仙波さんとか、サポートしてくれる人と会うことができました。これには大変、感謝しています。

ただここには、「しかし」という但し書きがあります。数分で説明するのは難しいのですが、活動すること（アクティビズム）によって感情的に非常に大きな打撃を受けるのです。これは私だけではなく、多くのDIで生まれた人たちが共有しているものです。

随分前、私が未熟なときには、DIの匿名性の何がいけないのか、そして、DIについて何がいけないかということを経験して理解してもらえなかったと思っていました。過去の過ちは繰り返されないと考えていたのですが、子どもにとっていいことをみんな欲しているのではと思っていましたが、それは大間違いでした。多くの人たちにとって、それを聞いて感情を理解するのは難しいことだったのです。そのDIの子どもたちのニーズを真剣に受け止めるのは難しく、聞きたくもないとい

う状況でした。

前にも言いましたが、私たちの感情は多くの人にとっては不都合なものでした。私は楽しみでこうしているのではなくて、将来の世代のために変化をもたらしたいからこれを行ったわけで、長年、批判に耐えました。拒絶されたり、ばかにされたり、無視されたり、心理操作をされたり、圧倒されたり、そういうことに耐えなければならなかったのです。これは親もそうです。親の気持ちも分かりますし、その抵抗も分かります。政治家、学者、不妊治療の診療所の人たち、あるいは、インターネットの多くの人たち、こういう人たちから非常にマイナスの反応がありました。

この発表ではこのようなことが無意味である理由については細かく説明しませんが、こうしたコメントが、生まれた人に罪の意識や恥の意識を植え付けるということを覚えておいてください。これは健全なことではありません。悲しみを深めるだけです。それで何が起きたかということ、2015年に私はあらゆることをやめました。医師が3カ月、休みを取ったほうが良いと言ったのです。自分に何が起きたのか、なぜ、私が何もしたくなくなってしまうのかということを理解するのに時間がかかりました。

ドナーが見つかる

2012年、テレビのドキュメンタリーに参加しました。DIで生まれた子どもとしてオランダに行って、フィオム（Fiom）という組織に行きました。提供者の登録制度を運営しているところです。番組用に私の血液のサンプルを採って分析をしてDNAを検査しました。オランダには私の生物学的父はいないので、しても何もならないことはわかっていたのですが、ところが生物学的な父親がこのショーを見て、私の話に心を動かされて、自分の提供で生まれた子どもと会いたいと思ったのです。その時、私がまさに彼の子であるということは彼も知りませんでした。彼はベルギーにボランティア登録ができるのを待っていましたが、それがなかなか叶わず、数カ月後、オランダでDNAテストを受けて、それで私たちが親子であるということが分かりました。ソーシャルワーカーがそのニュースを電話で伝えてくれたときに、私は信じられないような気持ちになりました。まさに全てが納得いくように思え、勝利を収めたような、非常にうれしい気持ちになりました。いろいろな邪魔が入ったにもかかわらず、これがうまくいったということですね。つまり、法律に対して、不妊治療業界に対して、活動してきて、勝ったと思ったのです。私には権利がないと言われ、そして、私のことなんて誰も気にしていないと語っていたそういう人たちに対して勝利をおさめたと思ったのです。

私たちは2015年の11月30日に初めて会いました。そして、生物学的な父親と6時間、ずっと話をしました。この6時間で、私自身の育ててくれた父親と話した以上にたくさん話をしたのです。性格、癖、そして、顔の特徴、価値観、ユーモア、非常に共通しているところがあり、ルーツが分かったような気がしました。私は、ものすごく乾いていたところに、急に水が与えられたような感じがしたのです。

私自身、鏡の中の自分を見ても、もう誰だか分からない人ではない、私は、私の母親の子どもであり、そして、生物学的な父親の子どもであるということを知りました。路上でいろんな

人を詳しく見ようとしたりすることからも解放されました。生物学的な父親と会うことで、私は認められたんだという気持ちになりました。そして、彼もそれを理解してくれました。

これが私のストーリーのハッピーエンドかと思われるかもしれませんが、でもそうではありません。たくさんの答えは出てきました。でも、新たな質問も出てきたのです。非常に親切な生物学的につながりのあるこの男性は、自分を見つけてうれしいと言ってくれました。でも最初の喜びが薄らいでくると、いろいろな気持ちがまた浮上してきました。DIのいろいろな悩みが出てきたのです。この人は一体誰なのかと、これは私にとってどういうことを意味して、この人とこれからどういう関係を築くのかと。そしてまた、新しい喪失感が生まれたのです。31歳でこの生物学的父親と会ったわけですが、同時にこの人は私にとって全くあかの他人のようなのです。彼は、私を見るときには愛する娘を見るようなまなざしで見ってくれるわけですが、私がどうもそれに納得がいかない。例えると、どうも、病院の瓶の中に私を置き去りにした父親と会ったような気持ちでした。感謝していない自分に対してこれは良くないという気持ちも生まれたのです。非常にDIで生まれた者としてうれしい体験をした後、悲しい気持ちにも襲われました。

まとめとして

では、まとめましょう。父親を発見してから他のことに目を移そうと思いました。常にDIのことばかり考えていたので、少し気分転換をして他のことを考えたいと思ったのです。でも残念ながら、今年また健康上の危機に直面しまして、体中、疲労感がひどく、リウマチ、関節炎などになってしまって、また非常に大きな悲しみを感じてしまったのです。DIであるということについて、今までそれに対応して、怒りを抑え込み、自分の声も検閲し、私の気持ちも過小評価をし、私の悲しみ、私の怒りを何とか知的に理解しようとしてきました。これは常に恥ずかしいという気持ち、そして、後ろめたい気持ち、そして、自らを守ろうという気持ちがあったからです。

このフォーラムで話さないかと言ってくださいまして、前に公の場でこのテーマの話をしてから数年たっているわけですが、今日は、私の声に検閲をかけることなく、正直に話ろうと思いました。自分のための治癒、そして、他のDIの人たちで発言できないでいる人たちに変わって話そうと思ったのです。それでも私は自己検閲をしてしまったと思うのですけれども、ご清聴、ありがとうございました。

Presentation

Good morning, everyone. It's morning here in Belgium. Thank you for inviting me today.

I live in Belgium, so I will talk a little about the Belgian situation, but also, we'll go into my personal experiences as being a donor-conceived person. I often compare donor conception to an iceberg, because it might seem simple on the surface, but underneath it is a giant hidden rock of complexities which a lot of people don't know about, so I would like to talk a little more about these complexities.

I'll first introduce myself. I was born in 1984, means 37 years old today. As the middle child of three, I work as a clinical psychologist myself. I live in Belgium in Hoboken, which is the city where the famous story of The Dog of Flanders is set. I've been told it's a famous story in Japan. I live together with my boyfriend and our dog, and I'm conceived through anonymous sperm donation.

I will first introduce you in short to the Belgian history and the legal context of donor conception before I go on to talk about my personal experiences. It is estimated that in Belgium, the first medically assisted sperm donations occurred in the late forties, early fifties. The first sperm bank offering frozen sperm was established in 1970. In the beginning, donor conception was only used for heterosexual couples wanting to have a child, but since the early 80s also lesbian couples and single women could have treatments with donor sperm.

It is estimated that today about 80% of the people getting donor conception treatments are lesbian couples and single women, so it's the large majority. By the late eighties, also egg donations were carried out. During the 1990s, import of Danish sperm increased a lot and it is estimated that today even two-thirds of the donor sperm used in Belgium is of Danish origin.

Until 2007, there was no legal framework regulating donor conception in Belgium. Clinics defined their own rules. In actual practice, donor anonymity prevailed, so clinics kept the identity of the donor secret and they also advised the parents to keep the method of conception secret to their environment and the children. This has changed a little bit since the eighties and nineties, mostly under the influence of lesbians and single women being treated more and more, because it's more difficult for them to hide that a donor has been used.

The method of conception as such became more visible in our society, and that helped somewhat to lift the taboo and secrecy, but it is probable that most of the heterosexual couples are still preferring secrecy. Today it still often occurs that children are not told they are donor-conceived.

In 2007, the law on assisted reproduction was issued and this law is still enforced today. The law prescribes donor anonymity as the first choice procedure, known donation is allowed in the sense

that recipient parents can bring their own donor, a personal acquaintance. This option was actually only included to compensate somewhat for the difficulty in finding voluntary anonymous egg donors. It is actually rarely used for sperm donation. It's also advised against by the clinics. Identity release donation, as it is common in for example Australia or New Zealand or the UK or the Netherlands is prohibited in Belgium.

Although one donor can supply to six families at maximum, there is no central register that keeps track of the total number of donations across hospitals. Limits might be exceeded and it happens. Eugenics is prohibited, but physical matching to the recipient parents is allowed. Commercialization is prohibited, but flat trade compensations for expenses are allowed which means that especially for sperm donors, when they don't have a lot of expenses to cover, they actually can make a good amount of money by donating, so this is commercial.

Offering counseling prior to and during treatment is mandatory by law. But disclosure is not to be explicitly advised. Today clinics advise parents to be open to their children, but there is a lot of freedom and autonomy given to the parents so they can decide for themselves.

In Belgium, the activism by adult donor offspring kind of started in 2012 only, so not long time ago, only 10 years. Our focus has been on political lobby, banning donor anonymity, also raising public awareness about the rights and the needs of a donor offspring and establishing a donor offspring community.

In 2015, parliamentary hearings were held where donor offspring were invited and heard our opinions. Also different recipient parents were invited to speak, as well as academicians, like ethicists and fertility doctors. This led to the submission of some new law proposals in the following months, ranging from completely banning donor anonymity to establishing a double track system where parents can choose between identifiable and anonymous donors, which I'm of course, opposed to. But until today, no consensus has been reached. We're now six years later and donor anonymity is still the prevailing norm.

At the end of 2015, the first Belgian donor conceived person was able to find her biological father through a donor registry in Netherlands. This person was me by the way; I will talk about it later. From 2017 on, more and more donor conceived people are using commercial DNA databases to search for their biological relatives combining commercial DNA testing with genealogical research, I think such as Damian did. It is becoming more and more popular and also leads to a lot of successes in the past years.

Actually, this is the de facto end of donor anonymity. In 2021, so this year, the Flemish government organized or established a so-called ancestry center, following parliamentary hearings as well to give attention to the victims of forced adoptions that happened in the past. They have decided to

establish this ancestry center as a means to repair broken family ties. Because of the similarities with the questions of donor offspring, they also welcome donor offspring and donors to register and have their DNA tested in this center, but the center just opened this year so I'm not sure how many people are already registered.

But this means, we now actually live in this typically Belgian situation, this absurdity which is a result of our very complex political situation where the federal law on the one hand still deprives children of their rights to know their genetic roots, but at the same time, these children can apply for DNA tests under Flemish law in the hope to find their lost genetic relatives. I expect this situation not to last very long anymore and that donor anonymity will be legally prohibited by federal law as well soon. These are some references to back up my story, the facts and data of the Belgian context.

I will now move on to speak about my personal story. I was conceived in the fall of 1983 through anonymous sperm donation because of fertility issues on the part of my dad. My parents were told to keep it a secret for me as well as for my siblings and for their environment, so they complied. During my childhood, I actually felt quite disconnected from the rest of my family, especially my paternal family. I felt like an outsider.

Maybe I should mention my parents divorced when I was eight and my dad moved out of our home. We visited him every Sunday, but we grew more and more distant. And when I was a teenager, I was really struggling with this distance. I felt estranged from my dad. I was often wondering how on earth it was possible that I descend from this man. There was no recognition, no connection, no involvement from his side, but I felt very ashamed and very guilty about this distance I experienced. I figured I must be a bad daughter for having these feelings and thoughts about my own dad.

When I was 21, I just had another nightmare about my dad and I was venting my feelings about it to my mom over breakfast, which wasn't the first time, by the way. And suddenly she became nervous and she said, well, I need to tell you something that I should have told you a long time before. Your dad is not your biological father. And I remember bursting into tears asking questions, what, how, and she explained.

I felt really shocked and upset, but at the same time, it was also like this giant 'aha-experience'. Finally my confusing feelings that I had for a long time made sense, but anyway, that moment was extremely disturbing. I stayed in bed for two days. I couldn't eat. I was crying the whole time. I felt sick. I felt revulsion towards my own body. My own skin, my appearance; looking in the mirror was awful. I felt estranged from my own reflection. I went through this massive identity crisis and also existential crisis, you could say. Because the world as I knew it had fundamentally changed, the order of things had collapsed. Everything I thought I knew could just as well be a lie. I was a lie. I lost this very basic form of trust that no one should ever be losing. As a human being, you need this

form of basic trust to survive in this world.

When I look back at how I was lied to for 21 years, by my own parents about such a fundamental thing, it's a bit weird that I wasn't angrier with them. I guess, seeing my mother cry while she was telling me the truth, hearing about her own struggle with the secrecy made me empathize with her. I realized that the secrecy was to be understood within a certain 'zeitgeist' and that they had acted with good intentions. And this became a massive recurrent theme in my experience of being donor conceived: if I don't want to upset my parents, or donor conception parents in general, I need to hide or downplay my own anger and my own grief. From that day on, day after day after day, I have been learning that my feelings of loss and betrayal are an inconvenient truth for others. Please remember that this is a crucial issue for many donor-conceived people. It really shouldn't be that way.

Back then, my mom had asked not to talk about it with other people. It made me feel very lonely. I was a 20-year-old girl studying at university, hanging out with my friends, discovering the world. And at the same time, I was losing myself and I was not allowed to speak about it with anyone. I felt like I was carrying a shameful secret - I was the shameful secret. It took me several months before I gave myself permission to talk about it with my closest friends. For years, this was impossible without bursting into tears. I kind of kept hiding my struggle most of the time.

In the months and the years that followed, a lot changed. My life had changed as I was slightly getting used to the notion of being donor conceived, I started to wonder what kind of person my biological father would be, who was this man that delivered half of my genetic makeup. My awareness grew that there was one specific man out there, which I had a unique and significant relation with, but I had no idea who he was.

I could run into him just like that on the street without realizing it. I became this person that was extremely perceptive of middle-aged men with blonde hair and blue eyes on the streets, in the supermarket, on the train. Everywhere I went, I started scanning every man for recognizable features and decided whether or not they could be my father. I can assure you, it's not a fun thing to do. It's disturbing, but I couldn't prevent it from happening.

When I was searching for information on the Internet, I learned that I had no rights whatsoever in this story. It seemed, I just had to accept that I would never know where I came from. That was really hard for me to take in. I've always been quite sensitive to matters of injustice. After a few years of fantasizing about breaking and entering and stealing my file, I decided to write a polite and sincere email to the head of the fertility clinic, where I was made.

I explained that I struggled a lot. I struggled a lot not knowing anything about my biological father and I asked for help. He never replied. When I called the clinic – the office, the desk, they gave me an appointment with a psychologist who basically just dismissed me. She didn't even want to tell

whether my files even existed or not. Later, I would see the same fertility doctor declaring on national television that they never had donor conceived people come forward asking questions. I'm 100% sure, I wasn't the only one.

As I learned more about the history and the current practice of donor conception, it became more and more clear that I was fighting against the powerful fertility industry that took no responsibility at all for the wellbeing of the products, the human beings, that they are still conceiving every day. Being donor conceived wasn't just an issue anymore between me and my parents. From then on, it became a thing between me and society. But I felt very powerless and very alone.

In 2011, I met my first fellow donor-conceived person. She kind of traveled the same journey as me and she was also very eager to take action and fight for her rights. It felt so good to finally talk to someone who deeply understood my struggle. It gave me strength. I was not alone anymore. Together we connected with several other donor conceived people. And throughout the years, I might have met dozens of them all over the world online and offline. Meeting fellow donor conceived people, struggling with the exact same issues as I did, has been vital for me. It really is the best antidote for the overwhelming guilt and shame that comes with being donor conceived.

On the other side, meeting all these people also deepened my understanding of how huge the problem is. It amplified my frustration about a massive systematic injustice. It's heartbreaking to know that everyday children all over the world are still born into lies, deception and irreparable loss of their biological family.

In 2012, I entered a new stage in my life where I would be a donor offspring rights activist. I did a lot of interviews, talked to politicians, spoke to a lot of recipient parents or intending parents. I'm really happy I did all this because it truly helped a little bit in raising public awareness, setting something in motion on the political level. I also met wonderful people along my journey, people all over the world who are supportive, like for example, Ken Daniels and Yukari, which I'm very grateful for. But there's a very, very big however here. It's hard to explain in just a few minutes how extreme the emotional toll is of this activism.

Again, this not only pertains to me, I share this experience with many donor-conceived people around the world who stick their necks out. A long time ago when I was still very naïve, I thought that if I just explained what's wrong with donor anonymity and certain aspects of donor conception, people will understand and will of course not repeat the mistakes of the past because they want the best for their children, I figured. Well, was I wrong! Apparently, it's very hard for many people to just listen and empathize with donor conceived people and to take their need seriously. Many people react defensively. They just don't want to hear it.

As I told you before, our feelings are an inconvenient truth for many. While I was sticking my neck

out, not for my own pleasure, but in an attempt to make a change for future generations, I have endured years of constant criticism, denialism, being ridiculed, dismissed, patronized, intimidated, gaslighted, overpowered by recipient parents - and of course, I can empathize with their feelings as well, and their resistance - but also by politicians, by academics, by fertility doctors and random people on the Internet - especially the latter can get really nasty.

I'm not going to go into detail about all the nonsense on this slide and why they are nonsense, but just remember that all these comments, they induce shame and guilt, and they constantly make us question the validity of our own grief. That's not healthy. It shouldn't be this way. What happens is that I actually crashed in 2015. I crashed at work. I completely shut down. My doctor sent me on sick leave for three months. Before I was even able to process what had happened, why I had crashed, I was surprised by a phone call.

In 2012, when I was participating in a TV documentary as a donor-conceived person, we visited the Netherlands, the organization, FION that runs the donor registry for Dutch donor conceived people. We decided to let them take my blood sample and have my DNA analyzed just to be able to film the whole process. Because of course it didn't really make sense to go searching for my biological father in the Netherlands, in another country.

Anyway, my biological father happened to have watched the show and felt very moved by my story. He decided he wanted to be findable for his donor offspring, not realizing he had been listening to his own biological daughter. He waited for a Belgian donor registry to be established, but as this wasn't happening, he finally decided to go to the Netherlands and have himself registered there. A few months later, a DNA test confirmed our relatedness.

When the social worker told me the news on the phone, I was completely over the moon. I had this most spiritual experience of my whole life that day. It felt like I was suddenly the middle of the universe and everything made sense. I also felt so powerful and victorious because I realized that I had achieved this myself in spite of all the obstructions. By telling my story on TV, my message had reached him. It felt like I had won the battle against a law, against a fertility lobby and everyone who had been telling me for 10 years that I had no right to know him and that he didn't care about me. I proved them wrong.

We met for the first time on the 30th of November, 2015. We spoke for six hours straight. In this one meeting, I exchanged more words with him than I ever did with my own dad during my whole life. It's not exaggerated. I recognized myself in facial traits, in his character, his habits, interests, values, humor. It felt so good, as if my roots had finally found fertile earth and were sucking up all the water. He brought pictures of himself at various ages, pictures of himself, of his relatives.

I could finally see the whole picture, my whole picture. When I look at myself now in the mirror, I

don't see a stranger anymore. It totally makes sense that I am the child of my mom and of my biological father. I was finally liberated from scanning random men in the streets. It was very restorative for me to meet my biological father. I felt really validated. He understood that I needed to find him. And that was the most important thing: I mattered to him.

Now you might think that this is the happy end to my story, while actually, it's not. I had found so many answers, which I'm still very grateful for, but new questions emerged. Now there was this man, this very, very kind person who was so happy that he found me. And of course, I shared that sentiment, but when my initial euphoria faded, I also felt so many other things.

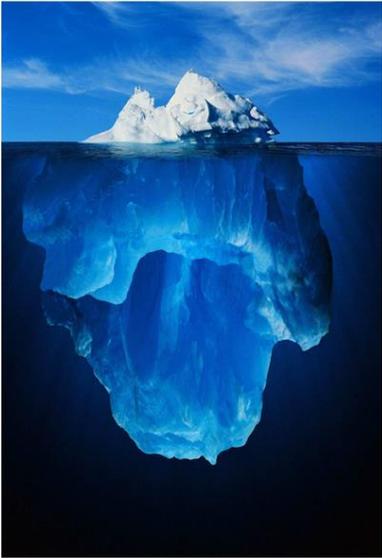
It's like, I also entered this new -- this next mindfuck, of being donor conceived. Who was this man? What does he mean for me? What kind of relationship should I have with him? I was confronted with new layers of loss, actually. I was 31 and I just met the man who is actually my original father. But at the same time, this man is a complete stranger to me. He was looking at me with the gaze of a loving father watching his daughter and it just, it didn't feel right for me. It felt really uncomfortable. It was like I just couldn't pick up where he left me 32 years ago in a jar in the hospital.

But again, I felt really guilty for being ungrateful again. It was really hard for me to realize that so soon after this euphorious and victorious experience as a donor conceived person, I was back in the position of the child trying to comfort the parent.

After I found him, I needed to concentrate on different things. I was so tired of being absorbed all the time by the whole donor situation. But unfortunately, this year I experienced another health crisis. I was exhausted again. I had pain all over my body. I needed to quit work again. I have been diagnosed now with rheumatoid arthritis. But while I was recovering, staying at home, I was again overwhelmed by this great sadness. And it's only now that I'm realizing and learning a lot again about how I have been dealing with being donor conceived all this time. I'm realizing that I have suppressed a lot of anger, that I've been censoring my voice, downplaying my feelings, intellectualizing my grief, my anger always because of guilt, shame, feeling responsible for other people's comfort and also to protect myself, I guess.

It's during this realization that Yukari contacted me a few months ago and asked me to speak at this forum. It's been several years since I've spoken publicly about the topic. I agreed and I promised myself to speak today without censoring my voice, not only for the sake of my own healing, but also for every donor-conceived person who has a hard time speaking up for themselves. I know this is a daily struggle for many of us. I'm done. I think I still censored myself a lot, but I'm growing. I thank you very much for listening.

Presentation Slides



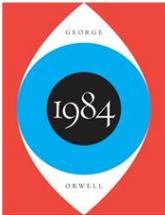
being
donor conceived
in Belgium

a personal story about the complexities
that lie beneath the surface

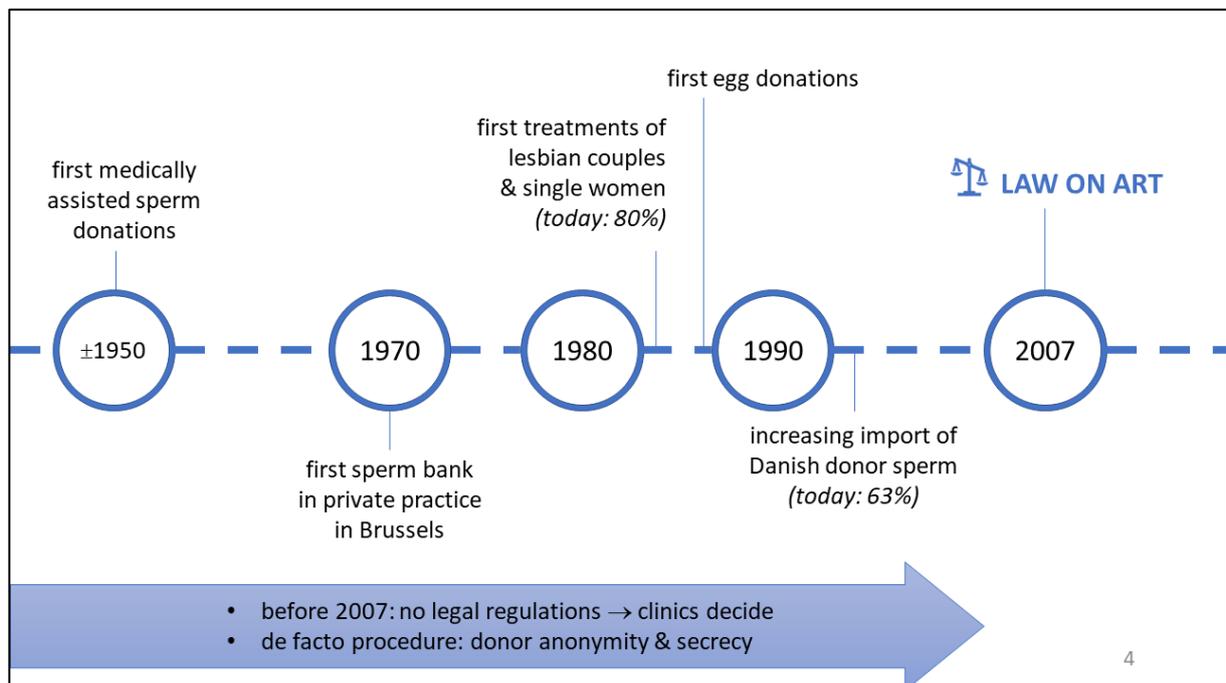
by Leen Bastiaansen

1

Introducing myself ...



2



2007: Law on Assisted Reproduction

- Donor anonymity is the norm
- Known donation is allowed (but rarely occurs and is discouraged)
- Identity-release donation is prohibited
- Max. 6 families (but no central register exists)
- Eugenics is prohibited (but matching is allowed)
- Commercialisation is prohibited (but flat-rate compensation for expenses is allowed)
- Offering counseling prior to and during treatment is mandatory, but disclosure is not to be explicitly advised



5

outset of donor
offspring activism

- political lobby: focus on banning donor anonymity
- raising public awareness
- DC offspring community

2012

parliamentary hearings,
including DC offspring
testimonies

first Belgian DC person finds
biological father through
Dutch donor registry

2015

submission of different federal
law proposals, ranging from
double-track system to complete
ban on donor anonymity
*(until today: no consensus, so
donor anonymity prevails)*

searching through commercial DNA-
databases becomes more popular →
more and more DC people are finding
their biological fathers this way

2017



establishment of Flemish
'ancestry centre' to aid people
(adoptees, DC offspring, ...) in
their search for genetic origins

2021

6

References

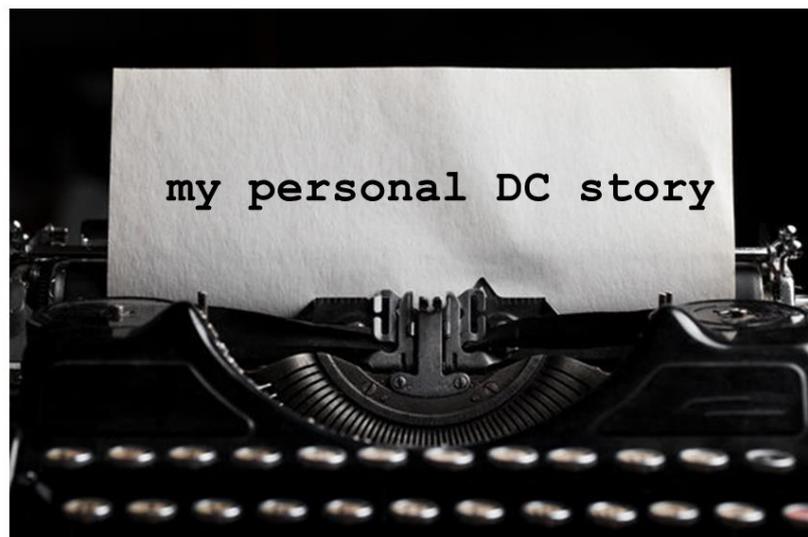
Law of 6 July 2007 on Medically Assisted Reproduction and the assignment of supernumerary embryos and gametes, Belgian Official Gazette, 17 July 2007.
http://www.ejustice.just.fgov.be/mopdf/2007/07/17_1.pdf#Page7

Ombelet, W., & Van Robays, J. (2015). Artificial insemination history: Hurdles and milestones. *Facts, Views & Vision in ObGyn*, 7, 137-143.

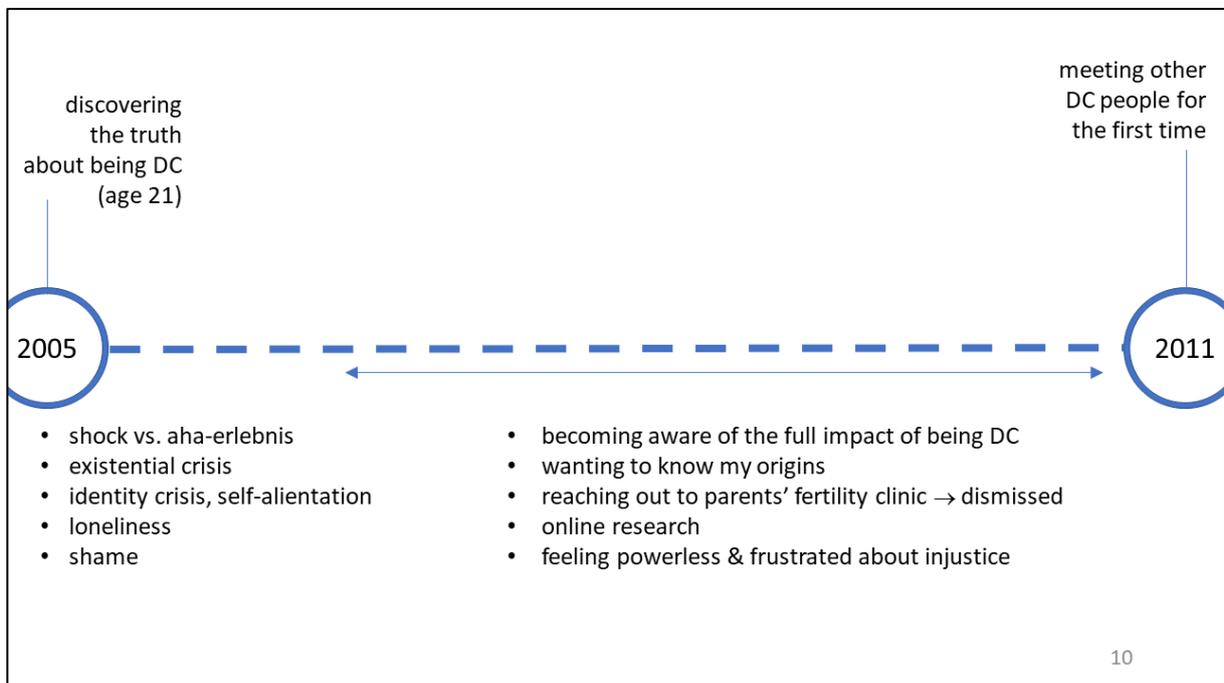
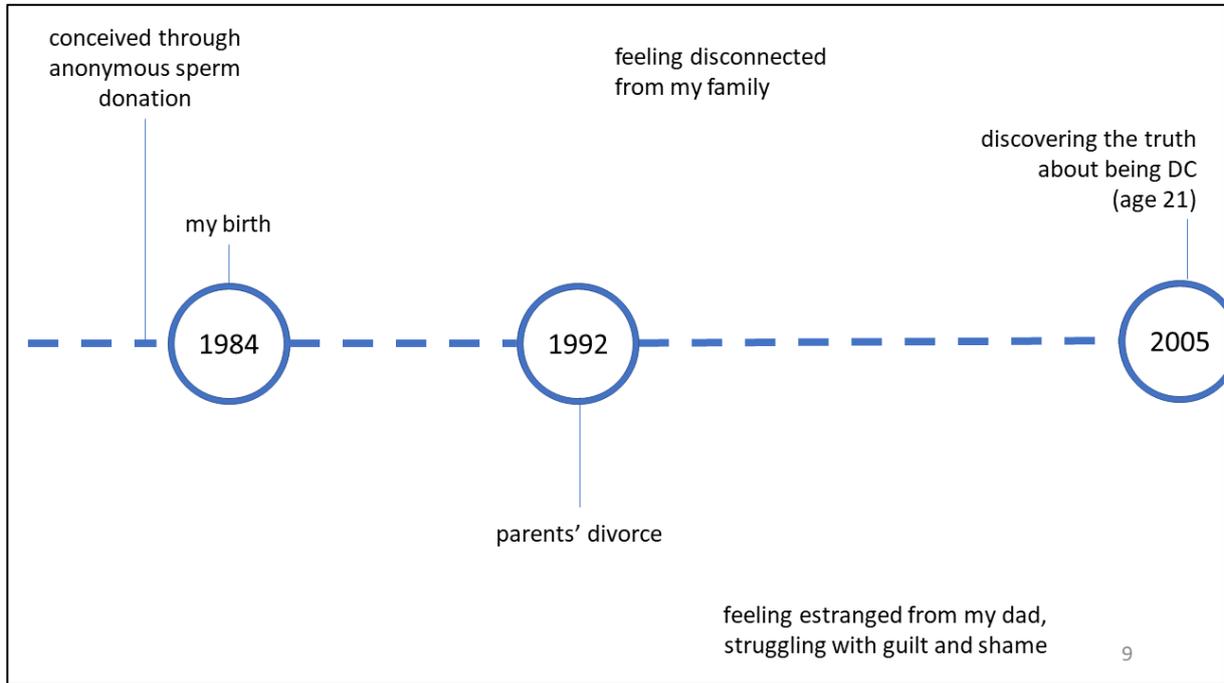
Pennings, G. (2010). The rough guide to insemination: cross-border travelling for donor semen due to different regulations. *Facts, Views & Vision in ObGyn*, 55-60.

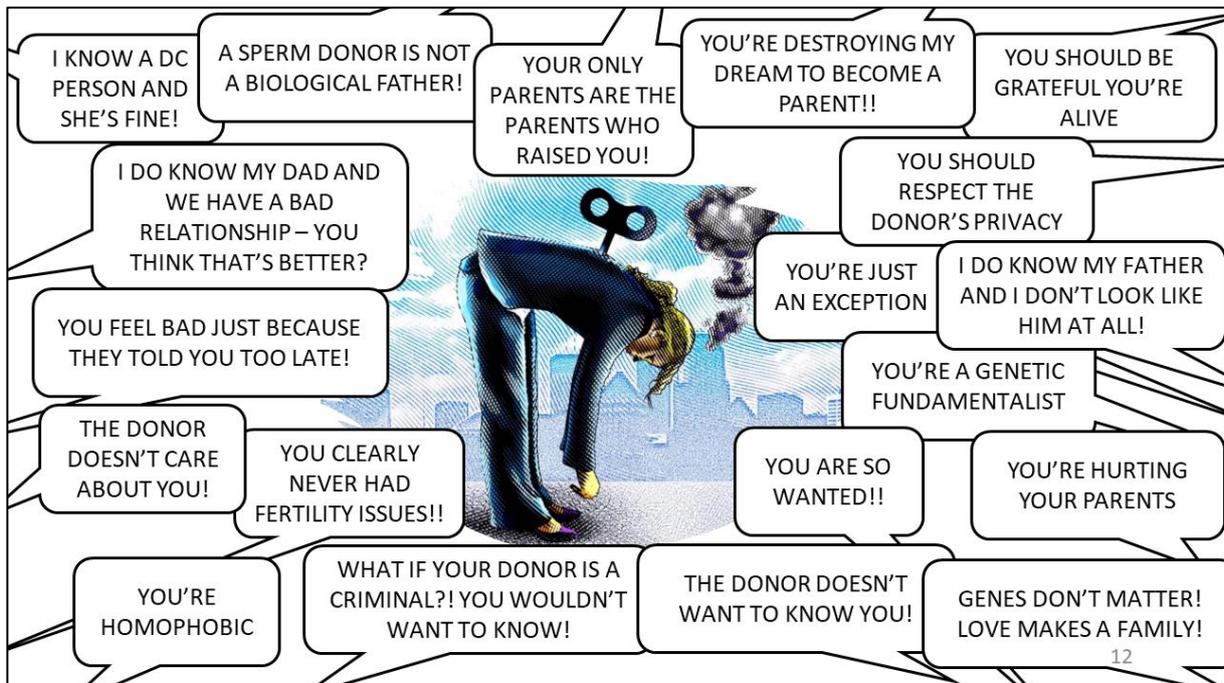
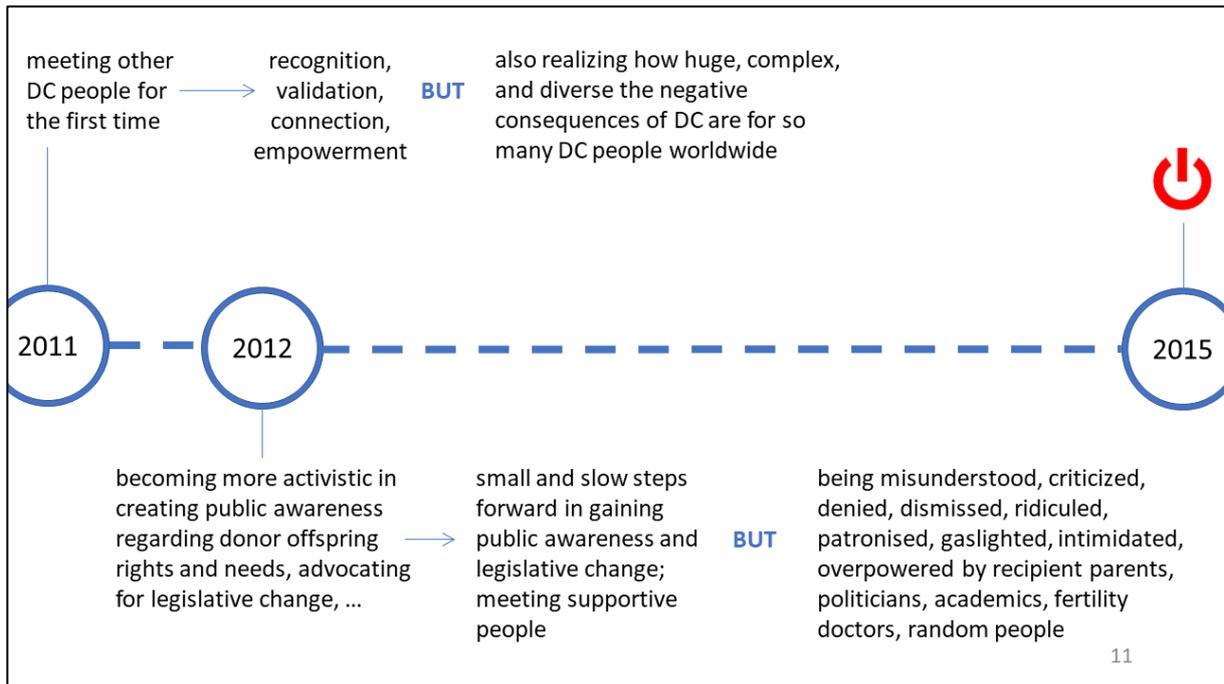
Thijssen, A., Dhont, N., Vandormael, E., Cox, A., Klerkx, E., Creemers, E., & Ombelet, W. (2014). Artificial insemination with donor sperm (AID): Heterogeneity in sperm banking facilities in a single country (Belgium). *Facts, Views & Vision in ObGyn*, 6, 57.

7



8





Finding my biological father through Dutch DNA donor registry

2015

2016

When I had all the answers, the questions changed.
Paulo Coelho

Who is this man to me?
What does he feel for me?
What do I feel for him?
What does he want from me?
What do I want from him?

Entering the next mindfuck.
Discovering new layers of grief.
Feeling guilty towards him (what's new?)

13

2016

2021

working hard, playing hard, living life

another health crisis ...

surprised by the immensity of unresolved grief, realizing I have been storing away my feelings, censoring my voice, intellectualizing and downplaying my pain, keeping a lot of anger inside, because of

guilt, shame, feeling responsible for other peoples' comfort. wanting to protect myself.

still growing ...



14

thank you for listening



✉ leen.bastiaansen@gmail.com

15

オンライン国際フォーラム
2021年8月29日(日)開催

出自を知ることがなぜ重要なのか Why Is The Right to Know Important?
提供精子で生まれた人たちの経験と思い The Experiences and Thoughts of Donor-Conceived People

